様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１８６１５

研究課題名（和文）保育における「子ども理解」形成のローカル・ダイバーシティ

研究課題名（英文）Local diversity in ECEC practitioners' attitudes and beliefs about children and their formation process

研究代表者
川田　学（KAWATA, Manabu）

北海道大学・教育学研究院・准教授

研究者番号：８０４０３７６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,800,000円

研究成果の概要（和文）：保育分野において多用される「子ども理解」概念について、保育の専門理論および養成に関わる内在的検討と、現代の主流の保育領域とは異なる背景から保育の「子ども理解」を相対化するモメントの2側面から検討した。前者では、身体化レベルの「子ども理解」に関する概念発展史研究の重要性を、また養成課程の重要項目である「子ども理解」において、実習の果たす役割と課題が整理された。後者では、「保育の論理」を共有しない地域住民の視点、保育運動時代の社会問題からの視点、「子ども理解」の背景としての宗教的価値観、近接領域としての子育て支援の視点がもたらす保育者のアイデンティティ変容などが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
小学校以降に比して構造化の曖昧さが指摘される保育実践において、「子ども理解」は保育を展開する上で重要な専門性の柱となる。特に、子どもと遊びや生活を共にしながら身体的・状況的に子どもの心情や行動の意味を理解しようとする日本の保育者において、「子ども理解」には保育者自身の背景が色濃く反映する。それは時に権力の無意識的な行使となり、専門性とは相対的に独立した価値観の押しつけを伴うリスクを孕んでいる。本研究は、保育における「子ども理解」を1つの問題系として対象化し、歴史および保育以外の視点からの客観的分析を行うことにより、保育における「子ども理解」の実践と研究に新たな枠組みを与える知見を提出している。

研究成果の概要（英文）：The concept of "understanding child"(“Kodomo-rikai”), frequently used in early childhood education and care(ECEC), was examined from two aspects: what are the issues in classical theories and current training curriculum, and to relativize this concept in ECEC from the perspectives of historical, regional, religious, and adjacent domain. In the former part of this study, the importance of historical research on the developing concept of "Kodomo-rikai" at the embodied level and the role and challenges of practical training in a real settings, were suggested. The latter clarified the perspectives of local residents who do not share the "logic of ECEC," perspectives from social issues during the nursery school building movement (1960’s - 1970’s), religious values and the identity development of ECEC practitioners through the experience of working in childcare support.

研究分野：子ども学

キーワード：子ども理解　保育　地域　規範化　保育者養成　生活史　子育て支援　キリスト教保育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、保育者の専門性の中核とされる「子ども理解」とその形成について、地域的、歴史的、個人史的な多様性と共通性を議論するために、子ども学・保育学の後続研究を刺激する概念枠組みの試論構成を企図したものである。

「子ども理解」とは、一般に保育者が子どもの行為や言葉、表現等を通して、子どもの行動や内面を理解する過程であり、その背景となる子ども観等の信念に関する価値体系をも含むものである。しかし、研究者はもちろん、実践者も頻繁に使用する用語であるが、専門辞典において独立した項目として共通定義がなされているとは言い難い。共通定義が定まらない状況で、「保育者はどう子ども理解をしているか」という実態把握や、「どのような子ども理解が適切か、優れているか」という規範提示が先行してきた状況があり、暗黙的な専門的実践を多分に含む日本の保育実践を対象とした場合、分析的な視座から「子ども理解」を対象化することそのものに難しさがあると考えた。

２．研究の目的

そこで、本研究では、「子ども理解」とは保育実践においてどのように意味づけられ、どのような役割を担っているものなのか、これを学的議論の俎上に載せるためにはどのような概念枠組みが必要なのかを検討することを目的とした。その際に、2 つの方法視点を用意した。

1 つ目は、「子ども理解」のローカリティへの着目である。「子ども理解」の実態にせよ規範提示にせよ、それらは保育研究者と実践現場の集中する大都市圏でのデータや議論から発出しているものが主流である。しかし、「子ども理解」は地域の生業や文化・風土、宗教観等を背景としたローカルな暗黙知とも不可分であろう。そこで本研究ではへき地や離島を含む多様な地域や現場での調査を重視することとした。

2 つ目は、歴史的・時代的な視座から「子ども理解」のあり様および形成と変容を考察対象とすることである。たとえば、保護者等の当事者が保育の場をつくり出す原動力となった保育運動の時代と、現在のように養成課程が完備され、“ 行政サービス ” として供給される側面の強くなった時代では、保育者の「子ども理解」のあり様も形成過程も大きく異なるだろう。

ローカリティと歴史的視座から「子ども理解」の保育にける意味、役割、その形成過程等に関する共通性と差異を検討することを目指した。

３．研究の方法

以上の問題意識と目的を達成するために、本研究は以下の 5 つの下位研究課題を設定した。

【初期「子ども理解」形成に関する研究】

保育者養成校の学生を対象とし、保育者としての「子ども理解」の初期形成において、養成校での授業・教科書の内容で何が重視されているのか、教育実習（保育実習）はどのような役割を果たしているのかについて検討する。学生への半構造化インタビューおよび養成校向けテキストや関連資料の分析を行うことを主たる方法とした。

【へき地・離島における保育者の「子ども理解」形成研究】

北海道の東部や北部のへき地、瀬戸内地方、沖縄県の離島部における保育施設を対象とし、「子ども理解」のあり様や形成に関わる地域的・歴史的条件を分析する。フィールドワークと史資料分析を主たる方法とした。

【保育所づくり運動時代の「子ども理解」形成に関する研究】

1960～70 年代のいわゆる保育運動時代に、本土に比べて保育普及の著しく遅れた北海道において保育所を立ち上げてきたインフォーマントへの半構造化インタビューおよび史資料の分析を通して、現在のように緻密なカリキュラムが組まれた養成教育を経由していない世代の実践者がどのような経験や情報を通して「子ども理解」を形成してきたのかを検討した。

【障害をもつ子どもの理解の形成過程に関する研究】

このパートでは、日本の保育実践である程度共通してみられる集団重視の視点とは対照的に、子ども個人を重視する傾向のあるキリスト教保育の実践者・現場をインフォーマントとし、特に障害をもつ子どもの保育に当たっての「子ども理解」の淵源を検討した。主たる方法は半構造化インタビューである。

【保育から子育て支援への移行による「子ども理解」変容に関する研究】

過去 20 年ほどの間に、保育においても子育て支援の重要性が高まり、制度変容も伴って各地の保育施設に子育て支援センター等の新しい実践形態が生まれてきた。その際、もともと「担任」として子どもへの保育を主たる業務として保育者としてのアイデンティティを構築してきた人が、子育て支援センターへの異動に伴って葛藤に直面する例が報告されてきた。このパートでは、子育て支援への異動を経験した保育者をインフォーマントとして、質問紙と半構造化インタビューにより、保育から子育て支援への移行に伴う葛藤を構造的に把握し、その中で「子ども理解」に関わる側面がどのような影響を受けたのかを分析した。

４．研究成果

以上の研究計画を立てて研究に取り組みはじめたが、本格的な調査に取り掛かろうとした 2 年目の 1 月以降、新型コロナウィルス感染症のパンデミックに見舞われた。1 年間の研究期間延長も行ったが、保育現場とその所在する離島やへき地へのフィールドワークを行うことは叶わず、また高齢のインフォーマントを対象としたインタビューも十全に行うことができなかった。その中で、当初の計画を変更し、文献検討によって保育における「子ども理解」の意味、役割、形成過程等について考察するパートを厚くするなど、当初計画からの変更も行いながら、大きく以下の 6 点の研究成果を得ることができた。

（1）「子ども理解」の概念整理

日本の保育学および保育実践において、「子ども理解」のモデルとして広く受容されている倉橋惣三と津守真の主要著作を対象に、子ども理解研究の方法としての独自性の観点から分析を試みた。一般的な児童心理学・発達心理学の立場からの「適切な子ども理解」の説明の文体と比較を行うことにより、倉橋の文章はそれ自体がオルタナティブの「子ども理解」の文体として、方法的に選択されてきたものであり、とりわけ、保育者への「伝達」の相に着目した点が特徴であることを示した。津守においては、それがさらに意識化され、心理学的な対象理解とは一線を画した子ども学としての「子ども理解」の体系の初歩を構築したと評価した。倉橋や津守の「子ども理解」の理論は、時々刻々と展開する子どもの心身の運動に状況即応的に反応し、身体の姿勢や運動として「子ども理解」が構成されていく事実に基づいたものであり、対象を研究者の意図で統制することを前提とした心理学的理解とは根本的に異なる体系が志向されたものである。これを踏まえ、保育における「子ども理解」を議論するめの基本的な水準として、「身体化レベル」「言語化レベル」「理念化レベル」の三層モデルを提案した。とりわけ、身体化レベルの理論化をどのように行うかに共通の課題があり、その概念発展史の研究が必要であろう。

（2）「子ども理解」の規範化と地域的多様性

日本の保育学および保育実践における「子ども理解」という概念の使われかたを検討した。その結果、第一に「子ども理解」はそれ自体が保育実践の規範として用いられるとともに、「子ども理解」の方法も規範化していること、第二に保育研究でも規範化された「子ども理解」を所与として論じられていたことが明らかになった。既存研究によると、「子ども理解」の方法では多面的な理解が重要であるという。ここでいう「多面的」とは、保育の論理を共有する人びとを指しており、保育の論理の外側にいる人びとの視点は意識されていない。この点に関して、保育の地域的多様性に焦点化した先行研究を参照しながら、「子ども理解」の地域的多様性も存在しうるのではないかという仮説を立てた。今後は、規範化された「子ども理解」とは異なる地平の「子ども理解」のありかたについて、さらに理論的検討を進める予定である。

（3）養成課程における「子ども理解」の初期形成

保育者養成課程のテキストには、子ども理解には「理論的理解」と「実践的理解」があり、この両面から子ども理解を深めていくことの重要性が示されている。実習はこの両面を行き来しながら子ども理解に関する学びを深めていく貴重な場であるが、実習での経験は学生によって様々である。そこで経験内容と子ども理解に関する学びとの関連を検討するために 4 年制の保育者養成校に在籍する学生に幼稚園教育実習での経験に関する半構造化インタビュー調査を行った。その結果、指導保育者から発せられる明示的・暗示的メッセージの受け止めにより学生が注力する事柄（「焦点」と呼ぶ）が異なり、「焦点」が「子ども」であったか否かによって学生の「子ども理解」に関する学びが方向づけられる可能性が示唆された。また、「子ども」に焦点をもつことのできた学生においても、その内実には、「子ども自体への理解」を深めていく方向性と、「子どもへの関わり方の理解」を深めていく方向性の大きく 2 つがあることが明らかになった。

（4）保育所づくり運動時代の「子ども理解」形成

1960 年代に共同保育所を立ち上げた元園長へ半構造化インタビューを行い、史資料の分析を行った結果、戦争体験、安保闘争、ベトナム反戦運動など社会情勢と、個人的な生育歴や生活経験、そして、子どものかかわりにおいて納得ができる手本を示してくれた先輩との出会いが「子ども理解」形成の根底にあることが語りから示唆された。さらに、保育園での子どもとのかかわりなどを振り返り、その事象に新たな意味づけを行う等、自己研鑽を続けていくことで「子ども理解」が深化されていることが明らかになった。

（5）キリスト教保育における障害をもつ子どもに対する理解

キリスト教保育を実践している幼稚園の理事長、幼保連携型認定こども園の園長への半構造化インタビューを通して、文献研究において示された、キリスト教保育における子ども理解の特色である「共に生きる」という言葉について考察することを試みた。インタビュー結果から、「共に生きる」とは、障害のある子どもを「特別な存在」とするのではなく、全ての子どもが、神に

より命を与えられたかけがえのない存在、尊い存在であり、多様な子どもたちが、共に生き、生活していくことを通して、一人ひとりに違いがあることを前提とした保育を追求していくための保育者の姿勢であることが示された。

（6）保育から子育て支援への移行による「子ども理解」変容に関する研究

分析結果からは、保育から子育て支援への移行を経験した保育者は、「クラス担任」としての「自己のアイデンティティの喪失」を経験しつつも、仲間・同僚からの支えや自分自身が親になることを通して「他者の視点」を獲得することで、子どもの育ちをより重層的に捉えることが可能になると結論づけた。子どもの育ちを子どものみに焦点化し理解するのではなく、子どもの生活と成長を支える子育て家庭（保護者）の存在、それを支える保育所・子育て支援センターの支え、更にそれらを支える地域でのつながりのなかで子どもの育ちを捉えるような「子ども理解」変容が確認された。地域のつながりのなかでこそ、より豊かな子どもの育ちが保障されるということを、保育から子育て支援への移行によって保育者が経験することで、移行経験者の「子ども理解」は、より豊富化されていくという研究成果が得られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計19件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 川田学	４．巻 168
２．論文標題 総論 問題としての子ども理解	５．発行年 2021年
３．雑誌名 発達	６．最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋真由美	４．巻 168
２．論文標題 学生は養成課程でいかに子ども理解を学ぶか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 発達	６．最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉川和幸	４．巻 168
２．論文標題 障害のある子どもに対する個別の指導計画、保育記録：保育者の子ども理解のために	５．発行年 2021年
３．雑誌名 発達	６．最初と最後の頁 33-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川田学	４．巻 16
２．論文標題 黒糖と海塩：保育の場の成り立ちとその意味	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育学の研究と実践	６．最初と最後の頁 74-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 17
2．論文標題 子どもの育ちを丁寧にみつめる：多面的な子ども理解に向けて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 児やらい	6．最初と最後の頁 95-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 52（10）
2．論文標題 かかわりが先、理解は（ずーっと）後	5．発行年 2020年
3．雑誌名 子どもの文化	6．最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 181
2．論文標題 「つながり」が生まれる保育：環境との関わりに主体性を読み解く	5．発行年 2020年
3．雑誌名 げんき	6．最初と最後の頁 2-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋真由美・川田学	4．巻 15
2．論文標題 学生の子ども理解に関する学びに影響を与える要因 ：幼稚園教育実習の経験との関連から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 子ども発達臨床研究	6．最初と最後の頁 11-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/rcccd.15.11	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 306
2．論文標題 “COVID-X”への想像力：マスク・行事・子どもの感情	5．発行年 2020年
3．雑誌名 季刊保育問題研究	6．最初と最後の頁 18-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ong,M.Y.L., Ho,K.L.C., Kawata,M., Takahashi,M., & Mizuno,K.	4．巻 －
2．論文標題 Understanding of base-10 concept and its application: a cross-cultural comparison between Japan and Singapore	5．発行年 2020年
3．雑誌名 International Journal of Early Years Education	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/09669760.2020.1848525	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 伊藤崇・中島寿宏・川田学	4．巻 31
2．論文標題 発達心理学研究におけるセンサを用いた行動認識技術の意義と課題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 発達心理学研究	6．最初と最後の頁 190-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 184
2．論文標題 「保育」と「発達」を結びなおす	5．発行年 2019年
3．雑誌名 幼年教育	6．最初と最後の頁 32-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 47(4)
2．論文標題 「自立心」はどう育つか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 幼児教育じほう	6．最初と最後の頁 12-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 160
2．論文標題 発達をめぐる真摯な問い	5．発行年 2019年
3．雑誌名 発達	6．最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 7
2．論文標題 乳幼児の遊びをめぐる「貧困」とは何か：この20年余りで子育て・保育を困難にしてきた構造的背景をめぐって	5．発行年 2019年
3．雑誌名 臨床教育学研究	6．最初と最後の頁 34-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 12
2．論文標題 「異年齢」において何を見るか：発達論への展望	5．発行年 2019年
3．雑誌名 子ども発達臨床研究	6．最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/rcccd.12.55	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 56
2．論文標題 エコロジカルシステムとしての「保育」の評価試論	5．発行年 2018年
3．雑誌名 保育学研究	6．最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.56.1_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川田学	4．巻 58
2．論文標題 異年齢期カップリングの発達学：＜イヤイヤ期＞を生み出す関係的力学の考察	5．発行年 2018年
3．雑誌名 小児の精神と神経	6．最初と最後の頁 97-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 榊ひとみ	4．巻 46
2．論文標題 地域子育て支援拠点における親とスタッフの子ども理解と親理解の展開過程	5．発行年 2019年
3．雑誌名 函館短期大学紀要	6．最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 川田学
2．発表標題 それはやはり、発達の分析単位に関わる問題ではないか
3．学会等名 心理科学研究会2021年度春の研究集会・方法論分科会
4．発表年 2021年

１．発表者名 川田学
２．発表標題 アイデンティティを語りたいのか：「行事」が保育の公共性にもつ意味
３．学会等名 日本保育学会第74回
４．発表年 2021年

１．発表者名 榊ひとみ
２．発表標題 「担任」から「子育て支援者」への移行に伴う子ども理解の変容-その論点整理を中心として-
３．学会等名 日本保育学会第74回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 川田学
２．発表標題 「発達」を受け止める環境の困難さ：北海道の子どもの生活実態調査から
３．学会等名 第32回日本発達心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉川和幸
２．発表標題 キリスト教保育における「障害のある子ども」に関する研究
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第30回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 川田学
２．発表標題 乳幼児期の子育て・保育の現代的課題：＜2歳児＞を中心に考える
３．学会等名 臨床教育学会第9回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川田学
２．発表標題 発達心理学と保育実践の交差点に潜む「発達」をめぐる問い：「年齢」問題から見えるもの
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 榊ひとみ
２．発表標題 保育者は「子育て支援」に関わることにより、子ども理解をどう変容させるか
３．学会等名 日本社会教育学会第66回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川田学
２．発表標題 ラーニングストーリーによる実践の変容：発達心理学からの提案
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 川田学
２．発表標題 倉橋惣三の「方法」：心理学的子ども理解と保育実践
３．学会等名 心理科学研究会2018年度秋の研究集会・歴史研究分科会
４．発表年 2018年

１．発表者名 川田学
２．発表標題 「保育」と「発達」を結びなおす
３．学会等名 全国幼年教育研究協議会2018年度冬の研究集会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川田学
２．発表標題 「問題」としての2歳児：もうひとつの”接続期”を考える
３．学会等名 京都保育問題研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 榊ひとみ
２．発表標題 「保育」から「子育て支援」への移行過程における子ども理解の再編成
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 榊ひとみ
２．発表標題 地域子育て支援拠点における親とスタッフの子ども理解と親理解の展開過程
３．学会等名 日本社会教育学会第65回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計8件

１．著者名 大泉溥・川田学・前田晶子・田岡昌大・加藤弘通・間宮正幸	４．発行年 2021年
２．出版社 クレス出版	５．総ページ数 360
３．書名 日本の子ども研究：復刻版解題と原著論文	

１．著者名 近藤幹生・幸田雅治・小林美希・本田由紀・普光院亜紀・川田学・池本美香・後藤英一	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 240
３．書名 保育の質を考える：安心して子どもを預けられる保育所の実現に向けて	

１．著者名 マーガレット・カー・ウェンディ・リー・大宮勇雄・塩崎美穂・鈴木佐喜子・松井剛太・磯部裕子・川田学・菊地知子・矢萩恭子	４．発行年 2020年
２．出版社 ひとなる書房	５．総ページ数 263
３．書名 学び手はいかにアイデンティティを構築していくか：保幼小におけるアセスメント実践「学びの物語」	

1．著者名 川田　学	4．発行年 2019年
2．出版社 ひとなる書房	5．総ページ数 248
3．書名 保育的発達論のはじまり：個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ	

1．著者名 小西　祐馬・川田　学編	4．発行年 2019年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 352
3．書名 遊び・育ち・経験：子どもの世界を守る	

1．著者名 心理科学研究会編（川田学・第13章）	4．発行年 2019年
2．出版社 有斐閣	5．総ページ数 316
3．書名 新・育ちあう乳幼児心理学：保育実践とともに未来へ	

1．著者名 大豆生田啓友、汐見稔幸、清水益治、渡邉英則、宮里暁美、川田学、田代幸代、那須信樹、大方美香、市川奈緒子、門田理世、秋田喜代美	4．発行年 2019年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 242
3．書名 保育者論	

１．著者名 須田治、川田学、松熊亮、小野學、榊原直久、東敦子、佐竹真次	４．発行年 2019年
２．出版社 金子書房	５．総ページ数 120
３．書名 生態としての情動調整	

〔産業財産権〕

〔その他〕

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター
https://www.edu.hokudai.ac.jp/rcccd/
北海道大学大学院教育学研究院　乳幼児発達論研究室
https://hokudai-cdee.jimdo.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉川　和幸 (YOSHIKAWA Kazuyuki) (30528188)	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・研修事業部・総括研究員 (82705)	
研究分担者	榊　ひとみ (SAKAKI Hitomi) (30757498)	札幌学院大学・人文学部・准教授 (30103)	
研究分担者	長津　詩織 (NAGATSU SHIORI) (40553491)	名寄市立大学・保健福祉学部・講師 (20104)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	美馬　正和 (MIMA Masakazu) (40738374)	北海道文教大学・人間科学部・准教授 (30121)	
研究分担者	高橋　真由美 (TAKAHASHI Mayumi) (50405643)	藤女子大学・人間生活学部・教授 (30105)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関